

マタイ福音書11:2-16:12の概略

- 「悔い改めなさい、天の御国が近づいた」が、マタイの主たるテーマである
- 4:18-11:1は、悔い改めの教えとするしるしの奇跡。主イエスが権威をもって知恵と力あるわざを行って悔い改めに導く
- 11:2-16:12は、主の知恵と力あるわざに対し、主イエスの声に聞き従うのか、つまづくのかが問われている段落である。
- 大きく二つに分けられ、さらに二つに分けられ、4段落構成
 - 11:2-19のヨハネの話（預言者の声に聞け）につづいて
 - 11:20-12:45は力あるわざ（母・兄弟まで） 対パリサイ人律法学者（偽善者）
 - 13:1-13:53は知恵の教え（母・兄弟まで） 対弟子と群衆（信仰が薄い者）
 - 14:1-12のヨハネの話（預言者を迫害する）につづいて
 - 14:13-36, 15:21-39は力あるわざ 対弟子と群衆（信仰が薄い者）
 - 15:1-20, 16:1-12は偽善（知恵の教え） 対パリサイ人律法学者（偽善者）

OpenAI o1

以下では、マタイ福音書11:2-16:12がどのように「主イエスの知恵と力あるわざに対して、人々が悔い改め従うのか、あるいはつまづくのか」という主題を軸として構成されているか、4つの大きな流れとして概観してみましょう。提示されている区分（4段落構造）は、ヨハネの出来事（預言者の声）を導入として、主イエスのわざ（力ある行為）と主イエスの教え（知恵）がどのように展開されるのかを軸に整理されています。

I. 11:2-19 ヨハネの話（預言者の声に聞け）

A. 文脈と概要

- 投獄中のバプテスマのヨハネが、イエスこそ来たるべきメシアなのかどうかを問いただす場面（11:2-3）。
- イエスは、盲人や病人が癒され、死人が生き返り、貧しい者への福音の宣教が行われている事実を挙げて、ヨハネに返答する（11:4-6）。
- さらに、イエスはヨハネが「女から生まれた者のうち」で最も偉大な預言者でありながらも、新しい時代（天の御国）の到来においては最も小さい者でも彼より大きいと語る（11:7-15）。
- 11:16-19では、ヨハネとイエスに対して批判的な姿勢をとる人々を「笛を吹いても踊らず、弔いの歌を歌っても悲しまない世代」にたとえ、悔い改めの招きに応じない人々を責める。

B. 主題的ポイント

- 悔い改めの声を上げる預言者（ヨハネ）の言葉に耳を傾けるか否かが問われる。
- イエスこそが救い主であるという証拠は、力あるわざ（奇跡的行為）によって明確に示されているにもかかわらず、それを認めない人々がいる。

II. 11:20-12:45 「力あるわざ」対パリサイ人・律法学者（偽善者）

この区分では、イエスが行う力あるわざ（奇跡）を目撃しながらも、悔い改めるところかイエスを批判するパリサイ人や律法学者たちが登場します。

1. 11:20-24 不信仰のまちへの嘆き

- コラジンやベツサイダ、カペナウムなど、奇跡を見ながら悔い改めない町々への嘆きと裁きの警告。

2. 11:25-30 「わたしのくびきを負いなさい」

- イエスは知恵ある者や賢い者（多くはパリサイ派や律法学者を暗示）に対してではなく、小さい者に御国の奥義が啓示されると語り、すべて疲れた人に休みを与えると招く。

3. 12:1-21 安息日論争・神のしもべ

- 安息日に穂を摘む弟子たちへの批判をきっかけに、イエスとパリサイ人との対立が顕在化。
- 引き続き安息日の癒やしをめぐる論争（12:9-14）。
- イザヤ書引用（12:18-21）により、イエスこそ神のしもべとして預言されていた存在であることを示唆。

4. 12:22-37 悪霊追い出しと聖霊を冒瀆する罪

- 悪霊を追い出すイエスの力を「悪霊のかしらベルゼブルによる」と非難するパリサイ人に対し、イエスは彼らの偽善を暴く。

5. 12:38-45 しるしを求める者たちへの警告

- パリサイ人や律法学者が「しるしを見せよ」と言うが、イエスはヨナのしるし（死と復活を暗示）以外に見せるものはないと宣言。
- その上で、悔い改めない世代に対する裁きを語る。

B. 主題的ポイント

- イエスの力あるわざを目の当たりにしても、彼を拒む宗教指導者たちの姿がクローズアップされる。
- 彼らの「しるしを求める」姿勢は、実はすでに示されている主の働きを認めようとしない不信仰の現れ。
- 偽善的であり、主がもたらす悔い改めの招きに真実に向き合わない。

III. 13:1-53 「知恵の教え」対弟子と群衆（信仰が薄い者）

この区分では、イエスの教えが「天の御国の奥義」を中心に語られ、弟子たちや群衆に対して「聞く耳」があるかどうか問われます。

1. 13:1-9, 18-23 種を蒔く人のたとえ

- 神の言葉が多様な土壌（心）に蒔かれるが、その実を結ぶかどうかは聞き手の姿勢による。

2. 13:10-17, 34-35 たとえの理由

- イエスは直接的に語らない理由として、たとえを通して「聞く耳のある者だけに」天の御国の奥義が示されるのだと語る。

3. 13:24-33, 36-52 その他の天の御国のたとえ

- 毒麦のたとえ、からし種のたとえ、パン種のたとえ、畑に隠された宝のたとえ、良い真珠のたとえ、網のたとえなど、御国の価値・性質・終末的裁きが多角的に示される。

B. 主題的ポイント

- イエスの教え（知恵）は「たとえ」によって語られ、理解には信仰とへりくだった姿勢が不可欠。
- 群衆や弟子たち（特に弟子たちですら）「信仰が薄い」状態にあり、イエスの言うことを十分に理解しきれていない様子がうかがえる。
- それでも弟子たちはなおイエスのもとに残り、たとえの説明を乞う点において、悔い改めへの可能性が開かれている。

IV. 14:1-12 ヨハネの話（預言者を迫害する）

A. 文脈と概要

- ヘロデ・アンティパスによるバプテスマのヨハネ処刑の記事が挿入される。
- 既に11:2-19で登場したヨハネが迫害され殺されるという形で、預言者への拒絶が顕在化し、人々の不信仰とつまずきが極まっていく。

14:13-36, 15:21-39 「力あるわざ」対弟子と群衆（信仰が薄い者）

1. 14:13-21 五千人の給食

- イエスはわずかなパンと魚を増やして大群衆に食物を与える。弟子たちは主イエスの力をなお十分に理解できず、食物の不足に気を取られる。

2. 14:22-33 湖上歩行

- イエスが水の上を歩く奇跡、またペテロが途中まで歩くも恐怖により沈みかける場面で、「信仰の薄い者よ」というイエスの言葉が印象的。

3. 14:34-36 ゲネサレ地方での病人たちの癒やし

- イエスの衣のふさに触れるだけで癒やされる人々の様子が描かれ、主イエスの力が強調される。

4. 15:21-28 カナン人の女の信仰

- イスラエルの民以外の異邦人の女がイエスに執拗に願い、娘の癒やしを得る。「信仰が薄い」と言われる弟子たちよりむしろ、異邦人の女のほうが強い信仰を示す。

5. 15:29-39 四千人の給食

- 五千人給食の奇跡と類似の行為が再び行われる。弟子たちが再び「パンがありません」と戸惑う姿は、彼らの信仰の薄さを再度浮き彫りにする。
-

15:1-20, 16:1-12 「偽善（知恵の教え）」対パリサイ人・律法学者（偽善者）

1. 15:1-20 パリサイ人の伝承批判と真の汚れ

- 手を洗わずに食べる弟子たちを批判するパリサイ人に対して、イエスは「人を汚すのは口に入るものではなく、口から出るもの（心の思い）が人を汚す」と語り、彼らの偽善を指摘。

2. 16:1-4 パリサイ人とサドカイ人の「しるし」要求

- 再び「しるし」を求める宗教指導者たちに対し、ヨナのしるし（死と復活を示唆）以外は与えられないと宣言、偽善を断罪。

3. 16:5-12 パン種のたとえ

- 弟子たちはパンを忘れてきたことであたふたするが、イエスの真意は「パリサイ人とサドカイ人のパン種（彼らの教えや偽善）を警戒せよ」という霊的警告であった。

B. 主題的ポイント

- 再びパリサイ人と律法学者との対決構図が前面に現れ、形式的な宗教儀礼を重んじながらも真の悔い改めからは遠い彼らの姿勢が描かれる。
- 「パン種」はマタイ福音書において象徴的に「隠れた影響力」を表すが、ここでは悪しき偽善の影響を意味する。

結論・まとめ

1. 悔い改めの招き

「天の御国が近づいた」という主題が、バプテスマのヨハネから継承された形でイエスの働きにおいて明示される。イエスの力あるわざと教えは、聴衆を悔い改めへと導くための明白な証拠となっている。にもかかわらず、宗教指導者たちだけでなく、弟子たちや群衆ですらも、しばしば信仰の薄さを露呈する。

2. 預言者の声に聞くか、迫害するか

11:2-19と14:1-12には、バプテスマのヨハネに関する出来事が対比的に配置されている。

- 前者では、悔い改めを呼びかける預言者の声を聞き、イエスのわざを評価するかどうか問われる。
- 後者では、ヘロデの家系によりヨハネは処刑され、預言者の声が世に受け入れられない現実が露わになる。

3. 「力あるわざ」と「知恵の教え」の対照

- 11:20-12:45と14:13-36, 15:21-39は「力あるわざ」が中心。イエスは病を癒やし、パンを増やし、悪霊を追い出し、人々を具体的に救う。
- 13:1-53と15:1-20, 16:1-12は「知恵の教え」が中心で、たとえ話を通して天の御国の奥義を語り、人を汚す本質が何であるかを教える。
- いずれにも、宗教指導者や弟子たち、群衆がどのようにイエスに反応するか（悔い改めて受け入れるか、あるいは拒絶・つまづくか）が強調される。

4. 偽善と不信仰に対する警告、そして招き

- パリサイ人や律法学者は偽善（表面だけの信仰）ゆえにイエスの奇跡を「ベルゼブルの力」などと批判し、悔い改めを拒む。
- 一方弟子たちはイエスに従う意思はあるものの「信仰の薄い者」と度々指摘される。それでもイエスのたとえの意味を尋ね続け、さらにその力あるわざを通じて少しずつ学んでいく。
- イエスは「すべて疲れた人、重荷を負っている人」を招いており、主のもとに来るならば安息と命が与えられることを強調する（11:28-30）。

以上を踏まえると、マタイ11:2-16:12の大きな流れは「悔い改めのメッセージ」と「イエスの権威と力」を軸に、人々の反応が二手に分かれていく過程を示しています。バプテスマのヨハネの姿は預言者の「警告の声」を象徴し、力あるわざと知恵の教えによって明らかにされるイエスの権威に対して、私たちは心を開いて聞き従うのか、それとも偽善や不信仰によってつまづくのか——この選択が鮮明に示される構造となっています。

4:18-11:1の段落と同様に、列王記のエリヤ、エリシャの奇跡の連想が多い

OpenAI o1

マタイ4:18-11:1の奇跡物語と、さらに11:2-16:12の諸場面には、旧約の預言者エリヤ、エリシャの物語を想起させる多くの要素があります。特に以下の点で共通点や連想が指摘されます。

1. エリヤ、エリシャと「悔い改め」の宣告・預言者的使命

● 預言者の継承

マタイ福音書においては、バプテスマのヨハネが「エリヤの再来」として示され（例：マタイ11:14, 17:10-13）、そこからイエスへと神のわざが継承される流れが強調されます。旧約では、エリヤからエリシャへと預言者職が継承され（2列王2章）、「奇跡を伴う預言者」の系譜がつながっていきます。

● 悔い改めの招き

エリヤは北イスラエルで偶像礼拝に陥った民と王に悔い改めを迫りました（1列王18章など）。同様に、ヨハネ（新約のエリヤ像）も「悔い改めよ」と叫び、イエスも「悔い改めなさい。天の御国が近づいた」（マタイ4:17）と宣教を始めます。

→ その流れで、マタイ4:18-11:1はイエスの権威ある教えと奇跡を通して民を悔い改めへ導く段落でした。

2. 病の癒やしや死者のよみがえりの奇跡

イエスによる病の癒やしや死者のよみがえりは、エリヤやエリシャの奇跡を想起させます。

1. エリヤが死んだ子どもを生き返らせる（1列王17:17-24）

- マタイ8-9章には、ツアラアト（重い皮膚病）の癒やしや中風の者の癒やし（8:1-17, 9:1-8）など、様々な癒やし奇跡が集中的に記されています。さらに9:18-26では、少女（会堂管理者の娘）の蘇生が描かれています。
- エリシャもシュネムの女の子どもをよみがえらせます（2列王4:18-37）。こうした死者のよみがえりの奇跡は、旧約のエリヤ・エリシャの物語が新約の読者に想起されやすい代表例です。

2. 異邦人への癒やし

- エリシャは異邦人の将軍ナアマンを癒やす（2列王5章）。マタイ福音書でも、異邦人に対する奇跡（たとえば百卒長のしもべの癒やし、8:5-13）が描かれ、神の恵みがイスラエルの境を越えるモチーフが提示されます。
- マタイ15:21-28でのカナン人（異邦人）の女の娘の癒やしも、同様に「イスラエルの垣根を越える救い」を強調します。

3. パンの奇跡（増加の奇跡）

エリシャのパンを増やす奇跡

- 2列王4:42-44では、エリシャがわずか20個の大麥のパンと穂麥の袋で百人を養う奇跡を行っています。

イエスのパンの増加の奇跡

- マタイ14:13-21（五千人の給食）、15:32-39（四千人の給食）は、旧約のエリシャのパン増殖の奇跡に対する明確な連想ポイントです。
- しかもマタイの場合、類似の奇跡（五千人と四千人）を2回描くことで、弟子たちがなおも「パンが足りない」と心配する様子（14:15、15:33、16:5など）が強調され、イエスが「信仰の薄い者たち」と叱責する流れ（16:8など）に繋がります。

4. 主イエスの歩みとエリヤ、エリシャとの類似点・相違点

- **場所（ガリラヤ周辺）**

エリヤとエリシャは北イスラエル（サマリア、ガリラヤを含む地域）を中心に活動しました。イエスもガリラヤ地方を主な舞台として宣教と奇跡を行うため、同じ地域圏での「神の奇跡を行う預言者（あるいはそれ以上の存在）」という連想が自然に起こります。

- **憐れみと解放**

エリヤやエリシャの奇跡は、「やむにやまれぬ貧困や死の危機」にある人々を救済するものが多い（未亡人の窮状、死んだ子どもの蘇生、飢饉への対応など）。イエスもまた、やむにやまれぬ病人や貧しい者、社会的に疎外された者の苦しみを解決する力を示し、悔い改めの道を開きます。

- **相違点としての「イエスの権威」**

旧約の預言者は明確に「神に仕えるしもべ」として奇跡を行いました。イエスの奇跡はしばしばイエス自身の言葉・権威によって直接なされます（「わたしが望む。きよくなれ」8:3、「起きなさい」9:25など）。マタイ福音書は「イエスの権威が神の権威と地続きである」点を強調しており、旧約預言者の奇跡をさらに上回る、メシアとしての権威を示す文脈が読み取れます。

5. まとめ

- **マタイ4:18-11:1**

イエスがガリラヤ周辺で行う数々の奇跡や権威ある教えは、旧約のエリヤ、エリシャ物語を想起させる仕方で描かれています。例えば、

- 死者をよみがえらせる

- 重い病・ツアラアトの癒やし
- 異邦人にも広がる恵み
などは、エリヤ・エリシャの働きが新約に継承されたかのように感じさせます。

● マタイ11:2-16:12

引き続きイエスの「力あるわざ（奇跡）」と「知恵の教え」を通して、人々の信仰の応答が試されています。特にパンを増やす奇跡（14:13-21、15:32-39）は、エリシャのパン増加の奇跡と明らかに対応するものとして読まれてきました。

さらに、バプテスマのヨハネ（新たなエリヤ）は迫害され殉教し、それを機にイエスがいよいよ本格的に人々を悔い改めへと招く流れへ進んでいきます。

旧約のエリヤが王妃イゼベルの迫害を受け（1列王19章）、エリシャに後を託す構図と重なり合う部分がありますが、マタイ福音書ではこの預言者の系譜を最終的に「神の子イエス」の十字架と復活へと向かわせる、より大きな物語へ発展させていきます。

こうした視点から見ると、マタイの著者は旧約のエリヤ、エリシャとイエスを対比・連想させることで、「預言者たちの流れを継ぐ真のメシア」あるいは「エリヤよりも大なる方」としてイエスを際立たせようとしていると考えられます。

すなわち、イエスは単にエリヤ的・エリシャ的な偉大な奇跡を行うだけでなく、悔い改めと神の国の完成をもたらす唯一の救い主である、というメッセージが全体を通して語られているといえます。

「天の御国が近づいた」という宣教の言葉は、このさばかれるべき悪と不品行の時代に、神のさばきが来ると警告する言葉でもある。さばきの日、世の終わり、安息日が言及されている。13章の天の御国のたとえも、さばきの日のたとえである。

OpenAI o1

マタイ福音書において「天の御国が近づいた」（4:17など）という宣教の言葉は、「神が支配権をいよいよ具体的に行使される時が到来する」という、救いの招きと同時に裁きの到来を告げる警告の意味をあわせ持っています。特にマタイ11～13章前後では、「さばきの日」「世の終わり」「安息日」といった言及が重なり、近づく神の国が必然的に「悪と不品行の時代」に対する裁きをもたらすことを示唆しています。以下では、いくつかのポイントに分けて解説します。

1. 「天の御国が近づいた」 = 救いと裁きの裏表

1) バプテスマのヨハネの宣教

- 「悔い改めなさい。天の御国が近づいた」（3:2）
バプテスマのヨハネは、悔い改めない者には火による裁き（3:10-12）が待っていると厳しく警告します。「御国の近さ」は神のご支配が明らかにされる時が迫っていることを意味し、悔い改めない者には裁きの日となるという二面性をもつわけです。

2) イエスの宣教

- 「悔い改めなさい。天の御国が近づいた」 (4:17)
イエスの宣教はヨハネのメッセージを継承すると同時に、より具体的な「よき知らせ」として人々に迫ります (4:23など)。しかし、実際には悔い改めずにイエスを受け入れない町々 (コラジン、ベツサイダ、カペナウムなど) には、旧約のソドムやツロ・シドンよりも厳しい裁きが臨む、と明言されています (11:20-24)。

2. さばきの日、世の終わり、安息日の言及

1) さばきの日 (11:22, 24など)

- コラジンやベツサイダなど、イエスの力あるわざを見ながらなお悔い改めなかった町々は、将来の「さばきの日」において厳しい裁きを受けると警告されています。
- この「さばきの日」とは終末的視点を背景としており、すべての人が神の前に立つ最終的な裁きを指し示す用語としてマタイ福音書にたびたび登場します。

2) 世の終わり (13:39, 40, 49)

- マタイ13章のたとえ話の中でたびたび「世の終わり」という言葉が出てきます (たとえば毒麦のたとえの解説13:39-43など)。
- これは「今の悪と不品行の時代」が終わり、神の王権がすべてを究極的に治める時を意味し、その際に悪は完全に排除され、神に従う者が最終的に報いを受けるという構図です。

3) 安息日

- マタイ12章でイエスとパリサイ人との論争で登場する「安息日」は、旧約の創造と出エジプトの完成を記念する日でありながら、マタイ福音書の文脈では、イエス自身が「安息日の主」である (12:8) と示唆されます。
- このように、イエスが安息日の権威さえも司る方であるということは、「真の安息 (ヘブライ4章が示唆するエスカトロジ的な意味も含め) をもたらす方」であると同時に、裁きの権威をも備えるメシア的存在であることを暗示しています。

3. 13章の天の御国のたとえ = さばきの日のたとえ

マタイ13章には、多くの「天の御国のたとえ」がまとめられています。その中で繰り返し強調されるのが、最後の裁きのときに「義なる者と悪しき者が仕分けられる」というテーマです。

1) 毒麦のたとえ (13:24-30, 36-43)

- 畑 (世界) には良い麦 (御国の子どもたち) と毒麦 (悪い者の子どもたち) が混在していますが、「刈り入れの時」 (13:30) に天使たちが悪を取り除き、火で焼き尽くす場面が描写されます。
- イエス自身が後に弟子たちへ解説しているように (13:36-43)、これは「世の終わり」 (13:40) に起こる裁きを明確に示すたとえです。

2) 網のたとえ (13:47-50)

- 海に投げた網があらゆる種類の魚を集めるが、良いものは集め、悪いものは捨てられる。これは「世の終わり」（13:49）に天使たちが「正しい人々」と「悪い者」を区別するイメージを直接的に示します。

3) からし種・パン種などのたとえ（13:31-33）

- からし種やパン種のたとえは、御国が「目に見えないほど小さな形で始まりながら、やがて大きく成長する」力を持つことを強調します。
- その成長の最終点には、やはり神の支配が完成する「終わりのとき」が前提としてあり、そこで悪と善の分別＝裁きが行われるという含意が背景にあります。

4. 「裁きの到来」＝「悪と不品行の時代」の終焉

以上を踏まえると、マタイ福音書でイエスが告げる「悔い改めよ、天の御国が近づいた」という宣教の言葉は、救済と祝福がもたらされる「神の王権の到来」のメッセージであると同時に、不信仰と不義を行う者に対しては厳粛な「裁きの時が近い」という警告でもあります。マタイ11-13章はこの両義性をはっきりと描写し、

- イエスの力あるわざ（奇跡）と知恵の教えによって悔い改めに招かれる者
- 悪意や不信仰ゆえに神の裁きを受ける者

が対照的に示されています。特に13章のたとえ話は、世の終わりにおける「御国の完成」と「悪の裁き」の二つを切り離さず語ることで、今この時代に生きる読者・聞き手を悔い改めに導こうとする意図があります。

まとめ

- **宣教のメッセージ**

「天の御国が近づいた」は「神の救いとご支配の到来」という福音としての要素と、同時に「悔い改めなければ神の裁きに直面する」という警告の両面を伴っています。

- **さばきの日のイメージ**

マタイ福音書では、「さばきの日」「世の終わり」「安息日の主権」などの語法・概念が随所に登場し、歴史の終末における神の決定的支配を描きます。それは「悪と不品行の時代」を終わらせる裁きとして具体化されます。

- **13章のたとえ話**

「天の御国のたとえ」であるにもかかわらず、その中心には最終的な裁き（毒麦のたとえ・網のたとえ）の視点があることから、御国が成就するその時に、悪と善がはっきり分けられる終末的な出来事が不可避であると強調されます。

したがって、マタイ福音書の「悔い改め」の呼びかけは、単に人間に「より良い生き方をしなさい」という道徳的勧告ではなく、「神の最終的な裁きと御国の完成の時が迫っており、今の時代を放置されることなく神の清算がある」という真剣な警告の呼びかけでもある、と理解できます。

また4:18-11:1の段落と同様に、モーセとヨシュアの時代も連想する。申命記の終わりには、主の宝の民となるために約束の地に入っていく時に、主の御声に聞き従うかどうかで、祝福とのろいのさばきがなされると誓うことになる。申命記29:4では、悟る心、見る目、聞く耳が要求され、申命記32章の警告の歌、契約の歌が与えられる。主イエスは、安息日を守る、父母を敬うという律法に言及し、荒野でのマナを思い出すパンの奇跡も行われた。

OpenAI o1

マタイ福音書4:18-11:1でのイエスの活動や教えは、旧約のエリヤ・エリシャだけでなく、モーセやヨシュアの時代とも重ね合わせられる面があります。特に申命記終盤の「祝福とのろい」「悟る心と聞く耳」「契約の歌（モーセの歌）」といった要素が、マタイの物語にも反映されていると捉えられます。以下では、その主な対応点を整理します。

1. 申命記の文脈：祝福と呪いの選択

1) 申命記28-30章：主の御声に聞き従うかどうか

- イスラエルは約束の地を前にして、モーセの律法を守るなら祝福、破るなら呪いという契約の誓約を立てました（申命記28-30章）。
- 申命記29:4（ヘブライ語29:3）では、「主が悟る心、見る目、聞く耳をあなたがたに与えてくださらなかった」という言及があり、真に神のみことばを理解し従う「目・耳・心」が強調されています。

2) 申命記32章：モーセの警告の歌（契約の歌）

- 申命記32章は、イスラエルが不従順に陥ったときにも証人として残る「歌」として与えられた警告の内容を含みます。
- モーセは、主の裁きと憐れみの両面を「歌」によって後の世代へ託し、「聞く耳」「学ぶ姿勢」を求めます。

これらは「聞くこと・従うこと」と「不従順の裁き」の対比が際立つ、まさにマタイ福音書の「悔い改めよ、天の御国が近づいた」という宣教と同様の構図をもっています。

2. マタイ福音書との対応

1) イエスの律法引用：安息日・父母を敬う

- マタイ12章で安息日をめぐる論争が描かれ、イエスは安息日規定の本質、すなわち「わたしは憐れみを好む」（ホセア6:6）の言葉によって神の御心を示します。安息日はただ形式を守るのではなく、神の憐れみと人を生かす祝福のためであると教えます（12:7-8）。

- マタイ15:1-9では「父と母を敬え」という律法（出エジプト20:12、申命記5:16）をめぐって、パリサイ人や律法学者の伝承を批判し、律法の本質は人間の内面（心）にあると語ります（15:18-20）。

これらは、**モーセの律法を正しく理解し、従うかどうか**、つまり「神の御声を聞き従うかどうかで祝福か裁きかが決まる」という申命記の構図と通じます。

2) 荒野でのマナの連想：パンを増やす奇跡

- マタイ14:13-21（五千人の給食）、15:32-39（四千人の給食）は、わずかなパンを増やし大勢を養う奇跡として描かれます。これらの奇跡は旧約のエリシャのパン増加（2列王4:42-44）とも重なる一方、より大きな背景として出エジプト16章の「荒野でのマナの給付」を想起させる面があります。
- 荒野で神がマナを与えたように、イエスは荒れ地で民を養います。さらにマタイ4章のイエスの荒野での試みにおいて、「人はパンだけで生きるのではない」（申命記8:3の引用）と答えている点も含め、**モーセ時代の荒野の経験**が背後にあります。

イエスがパンを増やす奇跡を繰り返して行うことは、神がご自身の民を荒野で養われたという「出エジプトの恵み」の再現・成就を示し、神が今またイエスを通してご支配を行っていることを示唆します。

3) 「悟る心、見る目、聞く耳」：たとえ話の目的

- マタイ13章でイエスは、「彼らは見てはいるが見ず、聞いてはいるが聞かず、悟ることもしない」（13:13）と言及し、イザヤ6:9-10の引用を通して「聞く耳を持たない者たち」を嘆きます。
- 申命記29:4と同様、「神が与える心と目と耳を持たなければ、悔い改めることができず祝福にあずかれない」という警告が響いています。

3. イエスを通してもたらされる「新しい出エジプト」と契約

1) 新しい指導者像：モーセ-ヨシュアからイエスへ

- モーセが荒野の期間を導き、ヨシュアが実際に約束の地へ人々を導いたように、イエスは「神の国」（天の御国）へ民を招く指導者として描かれます。
- ヨシュアは「主は救い」という名の意味を持ちますが、イエス（ヘブライ語でヨシュアと同根の名）は「その民を罪から救う方」（マタイ1:21）と宣言され、新約的な意味での「神の国」への道を切り開いていきます。

2) 新たな契約の成就

- 旧約の終わりにモーセが歌（申命記32章）を通して警告した「破棄されることなく残る証言」は、新約においてイエスの言葉や教え（マタイ5-7章の山上の説教、13章のたとえ話など）として提示されます。
- イエスはモーセの律法を廃棄するのではなく「成就するために来た」と宣言し（マタイ5:17）、律法の本質が人間の内面の変革と神の国への備えにあることを示します。

4. まとめ

1. 祝福と裁きの二面性

申命記が示す「主の声に聞き従えば祝福、従わなければ呪い」という構図は、マタイ福音書における「悔い改めて神の国に入るか、拒んで裁きに陥るか」というメッセージに重なります。

2. 見える目・聞く耳・悟る心の必要

申命記29:4の主題は、マタイ13章などでイエスがたとえを用いて語る際の「聞く耳を持つ者だけが御国の奥義を悟る」という教えに直結します。

3. 安息日・父母を敬う・マナの奇跡

イエスの律法に関する論争（安息日、父母を敬う）や、荒野でのマナを連想させるパンの増加の奇跡は、モーセの律法や出エジプトを再解釈し、神の国における新たな律法の完成を示すものです。

4. 新しい出エジプト、新しい契約

旧約のモーセ-ヨシュアに重なりつつ、イエスははるかに高い権威をもって神の国へ民を導きます。これはイスラエルの歴史における最大の出来事である出エジプトを、終末的・完全な救いへと向かう新しい出エジプトとして再提示する構図とも言えます。

このように、マタイ4:18-11:1の段落（さらには11-16章も含めた一連の物語）におけるイエスの教えと奇跡は、モーセやヨシュアの時代の「約束の地への導き」、そして「祝福とのろい」「聞く耳と悟る心」という申命記の主題を想起させる要素が多分に含まれています。それらは最終的に、イエスこそが神の民を「真の安息」へ、そして「神の国」へ導く唯一の指導者・救い主であることを示すものとなっています。

また、たとえを語ることは、ソロモンの知恵、箴言を連想する。アブラハム、ダビデ、ソロモンのように、正義と公正なさばきを行うことが知恵である。

OpenAI o1

マタイ福音書におけるイエスのたとえ話や知恵の教えは、ソロモン王が多くの箴言を語り、広大な知恵をもって裁きを行った旧約の伝統（列王記上3-4章、箴言）を想起させる側面があります。さらに、マタイ1章で示されるアブラハム、ダビデ、ソロモンの系譜を通して、正義と公正なさばきを行う真の王としてのイエスの姿が浮かび上がってきます。以下では、その対応と関連点を整理します。

1. ソロモンの知恵と箴言、そしてイエスのたとえ

1) ソロモンの知恵

- **ソロモンの祈り:** 列王記上3:9-12で、ソロモンは「正しいさばきを行うための知恵」を神に求め、神は「誰にもまさる知恵と識別力」をソロモンに与えます。
- **多くの箴言・譬え:** 列王記上4:29-34には、ソロモンが「箴言三千を語り、その歌は一千五首あった」だけでなく、自然界や動物に至るまであらゆる分野にわたる知恵をもって語ったと記されています。

2) イエスのたとえ話

- **マタイ13章の天の御国のたとえ:** からし種、パン種、毒麦、網など多様な比喩を駆使して、神の国の性質や終末における裁きを教えています。

- **イエスとソロモンの比較（マタイ12:42）**：「南の女王（シェバの女王）がソロモンの知恵を聞くために来たが、それよりも優れた方がここにいる」というイエスの言葉によって、**イエスの知恵はソロモンを上回るものであると宣言**されます。

こうして、イエスが語る「天の御国の奥義」は、ソロモンの箴言的な知恵を継承しながらも、さらに卓越した権威と真理をもっていることが強調されます。

2. アブラハム、ダビデ、ソロモンの系譜と正義・公正なさばき

1) マタイ1章の系譜

- マタイ福音書は「アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図」（1:1）として始まり、イエスが「アブラハム契約（すべての国民への祝福）」と「ダビデ王家のメシア的継承」の両方を完成させる方であることを示します。
- 系譜の中にソロモンの名（1:6-7）も含まれ、ダビデ王の後継者としてかつてイスラエルを黄金時代へと導き、知恵あるさばきを行った人物が想起されます。

2) アブラハム、ダビデ、ソロモンと「正義と公正」

- **アブラハム**：「地上のすべての民族があなたによって祝福される」（創世記12:3）の約束を受け、信仰に基づき神に従う模範的存在。
- **ダビデ**：神の心にかなった王（1サムエル16:7, 13:14）として、イスラエルを正しく治め、救い主の原型・型とされる存在。
- **ソロモン**：神に求めたのは富や長寿ではなく「正しく民をさばく心」であり（列王記上3:9）、実際に多くの民事を公正に裁き、列王記上3:16-28の有名な「二人の母の訴え」などの知恵の判決を行った。

こうした旧約の重要人物たちが皆「正義・公正なさばき」あるいは「神との契約を守る信仰」に特徴づけられており、最終的にイエスはそれらを結集させ、完全に実現するメシアとして描かれます。

3. 正義と裁きの知恵：イエスの教えに見るソロモンの要素

1. 山上の説教（マタイ5-7章）

- 「義」に言及が多く、「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」（7:12）という黄金律など、箴言的な教訓や具体的な生き方の指針が示される。
- 内面的な動機（怒り、姦淫、祈り方、施し方など）にまで踏み込む、深い識別力がある。

2. マタイ12:42の宣言

- すでに触れたように、ソロモンを上回る知恵がイエスにあると明言され、特に「さばき」の文脈で述べられている（南の女王とニネベの人々が「この世代をさばく」と述べられる前後）。
- イエスが行うさばきは、単なる王としての人間的な行政裁判を超えて、終末的・神的な権威をもって善悪を分別し、正義を貫く。

3. たとえを用いた説教（マタイ13章）

- ソロモンの箴言は短い格言や具体的な比較を通して人々に知恵を与える形式だが、イエスは「種まき」「麦と毒麦」「からし種」「パン種」「網」など多様なたとえを用いて「天の御国」の性質や終末の裁きを教える。
- これらは単なる道徳的教訓というより、神の国の奥義を指し示す深い霊的真理として語られる。イエスは「聞く耳のある者だけ」が理解できるように教える点（マタイ13:11-16）でも、ソロモンをはるかに超える知恵を示唆する。

4. まとめ

- **イエスの知恵と裁きはソロモンを上回る**

ソロモンは旧約において「最も知恵ある王」と評され、多くの譬えや箴言を語りましたが、イエスはマタイ福音書12:42で「ソロモンよりも優れた方」と位置づけられ、神の国のたとえを通じて最終的な真理と裁きを示します。

- **正義と公正を行う王の系譜**

マタイ1章に示されたアブラハム、ダビデ、ソロモンの系譜は、神の約束を継承し「正義と公正」を行う王像を背景に持つ一方、イエスはそれをすべてまとめ、完成へ導くメシア王です。

- **真の知恵は神の言葉に従い、悔い改めて生きること**

旧約の箴言・知恵文学が「主を恐れること」が知恵の初めだと語るように（箴言1:7など）、イエスの教えも「神の国を認め、主の御声に従う者こそが真の知恵を得て、祝福にあずかる」と結論付けます。逆に、聞いても聞き入れず、見ても認めない者は終わりの日の裁きを免れない、とたとえによって厳粛に警告されます（マタイ13章）。

このように、マタイ福音書におけるイエスのたとえと知恵の教えは、**ソロモンの箴言的伝統を想起しながら、より深く、より終末的・完全なかたちで「神の国の正義と公正」を実現するメシアとしてのイエス像を明確に示している**と言えます。

アブラハムの知恵は、創世記18章で、ソドムとゴモラのさばきの日に、ロトのために執りなしの祈りをすることで表されます。特に18:18-19に、アブラハムが選ばれて、**正義と公正を行う使命が書かれています**。また、その約束の通りに、子孫ダビデに **2Sm 8:15** その子ソロモンに **1Kg 10:9** 受け継がれています。

OpenAI o1

創世記18章では、アブラハムがソドムとゴモラの裁きに際して主と対話し、ロトのために必死に執り成しの祈りを捧げる場面が描かれます。そこで見られるのは、神との親しい交わりの中で「正義と公正」を求めるアブラハムの姿です。特に創世記18:18-19には、アブラハムが「正義と公正を行う」使命を担う者として選ばれたことが明確に示されます。以下では、そのポイントと、ダビデやソロモンへの継承の流れを概観します。

1. アブラハムの知恵と「正義・公正を行う」使命

1) 創世記18:18-19の主題

- 創世記18:19では、主が「わたしは彼（アブラハム）を選んだ。彼がその子たちと家の者たちに命じて、主の道を守り、正義と公正を行わせるためである」と語られます。
 - ここで言及される「正義（*דִּינָא*, ツェダーカ）」と「公正（*צְדָקָה*, ミシュパート）」は、旧約全体を通じて神が望まれる秩序・裁き・正しい行いを示す重要な語です。
 - アブラハムは単に「信仰の先祖」であるだけでなく、子孫へ「神の義と正しいさばきに従う」道を受け継がせる指導的役割を担っていることが分かります。

2) ソドムとゴモラへの執り成し（創世記18:20-33）

- アブラハムは、主がソドムを滅ぼそうとされることを知らされると、「正しい者を悪い者と共に滅ぼすことは、あなたにはありえないことです」と言って、主の「正しいさばき」を求めます（18:23-25）。
- ここでは、アブラハムの「知恵」（あるいは神との親密さ）が表れ、たとえソドムにいる義人がわずかでも滅びから救われるよう執り成す姿勢が強調されます。
- 結果として、ロトは滅びから救い出されますが、一方でソドムとゴモラはその悪のゆえに裁きを受けることになり、「主は義と公正を行われるお方」であることが示されます。

2. ダビデとソロモンへの継承：正義と公正を行う王

アブラハムに与えられた「正義と公正を行う」使命は、イスラエルの歴史においてはダビデ王とソロモン王へと具体的に継承されていくことが、サムエル記・列王記などで語られます。

1) ダビデ王の統治：2サムエル8:15

- 「ダビデはイスラエルのすべてを治め、すべての民に正しいさばきと正義を行った」（2サムエル8:15）。
- ダビデはイスラエルを統一し、外敵を制し、国内の秩序を確立していく過程で、人々が安心して暮らせるように「正義と公正」をもって治めたと評されます。
- これは、ダビデ自身が単に政治力に優れていたというだけでなく、アブラハム以来流れてきた「主なる神への信仰」と「義と公正の精神」を体現する王として描かれているからです。

2) ソロモン王の統治：1列王記10:9

- 列王記上10:9では、シェバの女王がソロモンを訪問した際、「あなたの神、主はほむべきかな。...あなたが義と正義を行うためにあなたをイスラエルの王として座に就かせた」という趣旨の言葉を述べます。
- ソロモンはダビデの継承者として、「あらゆる王よりも勝る知恵」を神から与えられ（1列王記3:12, 4:29-34参照）、その知恵を生かして公正な統治を行いました。
- ダビデとソロモンは、アブラハムに与えられた祝福と約束（創世記12:2-3, 15:5-6, 18:18-19）の流れの中で「イスラエルを治める王としての模範」を示すわけです。

3. まとめ

1. アブラハムの知恵：正義と公正を行う使命の萌芽

- 創世記18章では、神との対話を通してアブラハムが「執り成しをする知恵」と「正しいさばきへの理解」を示し、彼自身が「正義と公正」を行う者として選ばれたことが明言されています。

2. ダビデ・ソロモンへの継承：王としての実践

- 2サムエル8:15や1列王記10:9は、「正義と公正を行う王」としてのダビデとソロモンの姿を描き、アブラハムに与えられた約束（子孫を通して神の正義が地上に広がる）が具体化されていく過程を示します。

3. 主なる神のご性質としての「正義と公正」

- アブラハム、ダビデ、ソロモンは、それぞれの時代において、神の「義と正しいさばき」の一端を担うように招かれた器でした。
- その源泉はあくまで神ご自身のうちにあり、彼らは主からの恵みと呼びかけを受けつつ、その使命を受け継いで実践していきます。

こうして、**アブラハムの知恵**はソドムとゴモラの滅びに際して執り成しをする中に示され、同時に創世記18:18-19が語るように「正義と公正を行う」務めが彼の子孫へと託されました。その流れを継ぐダビデやソロモンも、王の座につきながら同じ使命を担い、イスラエルの歴史の中で具体的に「義と公正」を施す者として描かれています。これは旧約聖書全体を通して一貫するテーマであり、最終的にはメシアにおいて完全な形で実現される――という文脈へとつながっていきます。

主イエスは、その約束の義なる王であることが11:2-16:12の中で明らかになっていきます。Psa 72:1-2 神よ、あなたの公平を王に与え、あなたの義を王の子に与えてください。彼は義をもってあなたの民をさばき、公平をもってあなたの貧しい者をさばくように。

OpenAI o1

詩篇72篇は、ダビデ王の子孫である王が「義と正義をもって民をさばき、公平をもって貧しい者をさばく」ようにとの祈願から始まり（72:1-2）、イスラエルにおける理想の王の姿を描写しています。これは同時に、旧約聖書を通して期待された「メシア王像」を示す代表的な詩篇の一つとされています。

マタイ福音書11:2-16:12では、主イエスがまさにその「義なる王」としての性質を具体的に示されていく過程が描かれています。以下では、この区間の主な場面を概観しながら、どのようにイエスが詩篇72篇の王の姿を体現しているかを整理します。

1. 11:2-19：バプテスマのヨハネによる問いとイエスの答え

● ヨハネの問い（11:2-3）

投獄中のバプテスマのヨハネは、「来るべき方はあなたですか、それとも他の方を待つべきでしょうか」とイエスに問いかけます。

● イエスの答え（11:4-6）

イエスは「盲人が見え、足なえが歩き、らい病人がきよめられ、耳の聞こえない者が聞き、死人が生き返り、貧しい者に福音が宣べ伝えられている」と告げ、旧約のメシア預言（イザヤ35:5-6、61:1など）を想起させる出来事がすでに始まっていることを示します。

この時点でイエスは、目に見える形で貧しい者・弱い者を顧み、公平に助けを与える義なる王としての姿を示し始めています。詩篇72:2の「公平をもって貧しい者をさばく」というイメージと重なり合います。

2. 11:20-12:45：イエスの正しい裁きと招き

1) 不信仰の町々への警告（11:20-24）

- イエスの奇跡を見ながら悔い改めない町々（コラジン、ベツサイダ、カペナウム）に対し、「さばきの日にはソドムの地のほうがまだあなたがたより軽い罰で済む」と厳しく宣告します。
- ここに、悪を悪と断ずる「王の裁き」の要素が見られます。詩篇72篇では「正しいさばき」によって悪を摘み取り、正しい者を守る理想の王が描かれますが、イエスはその基準を明確に打ち出しています。

2) 「わたしのくびきを負いなさい」（11:25-30）

- 一方で、イエスは「疲れた人、重荷を負っている人はだれでも、わたしのもとに来なさい」と招き、安息を与える王としての憐れみの姿を示します。
- 「義と公平」が単なる厳罰主義ではなく、弱った人を招き入れる寛大さやあわれみと結びついている点は、詩篇72篇の「民を正しく治め、貧しい者を助ける王」のイメージとも通じます。

3) 安息日論争・悪霊追い出しと裁き（12章）

- パリサイ人たちが安息日の規定を外面的に押しつけるのに対して、イエスは真の意味で人を生かす「安息日」の本質を指し示し（12:7-8）、偽善を批判します。
- また、悪霊追い出しの力を「ベルゼブルによる」と非難するパリサイ人に対し、イエスは「もしわたしが神の御霊によって悪霊を追い出しているのなら、神の国はあなたがたに来ているのです」（12:28）と宣言します。

ここでは、正しい基準によって善悪を分別し、人々を重荷から解放する権威を示すイエスの姿が強調されます。「義なる王」のさばきは、人を縛る不当な戒め・悪霊の力を打ち破る点で表されています。

3. 13章：天の御国のたとえ——義と裁きの完成

マタイ13章は「たとえの章」と呼ばれ、天の御国（神の国）の性質と終わりの日の裁きが語られます。

1. 毒麦のたとえ（13:24-30, 36-43）

- 畑に毒麦が紛れ込むが、最後の刈り入れ時に「正しい者」と「不法を行う者」とが分けられ、毒麦（悪）は火で焼かれる。
- イエスはたとえの解説で「人の子」は麦を蒔く者であり、終わりに天使たちを遣わして悪を裁かれると語ります。
- ここに「正義と公正に基づく裁き」が将来完成に至るビジョンが示され、イエスはその権威ある王として終末的な裁きを行うことが明らかになります。

2. 網のたとえ（13:47-50）

- 網があらゆる魚を集めるが、良いものと悪いものが仕分けられる——これは終わりの日の裁きを象徴しており、イエスが「正しい者を集め、不義な者を取り除く」王として描かれます。

たとえを通して、イエスが最終的な裁きにおいてこそ「義なる王」としての権能を完全に発揮する姿が強調され、詩篇72篇の願いである「義と公平をもって人々をさばく王」が最終的に成就する未来像が示されます。

4. 14:1-16:12：奇跡と教えによる公正の実践と偽善への対峙

11:2-16:12の後半部（14-15章）では、イエスによる奇跡的な癒しやパンの増加の出来事が連続し、弱者への憐れみや支えが具体的に示されます。さらに15-16章では、偽善的なパリサイ人・律法学者に対する厳しい批判が続きます。これらは

- 貧しい者、病んでいる者をあわれみ、彼らを養う
- 形式的な戒めだけを盾にとる宗教指導者を厳しく戒める

という二面の働きを通して、「義と公正」を実行する王の姿を提示します。詩篇72篇の「貧しい者をさばく（守る）」と「圧制から救う」イメージが、イエスの奉仕において具体化されていると言えるでしょう。

5. まとめ：詩篇72篇とイエスの王権の完成

- 詩篇72篇の背景
ダビデ王（もしくはソロモン）の治世を念頭に「義と公正を行う王」を願い求める内容ですが、同時に旧約伝統の中で「メシア王」への期待を高める詩篇と理解されてきました。
- マタイ11:2-16:12で明らかになるイエスの姿
 1. 病人・弱者の救い：イエスの奇跡（盲人や足なえの癒し、悪霊の追い出し、パンの奇跡）を通じて、弱き者に具体的な援助を与える。
 2. 不正への裁き：悔い改めない町々や偽善的な指導者たちへの宣告、たとえ話で描かれる終末の裁き。
 3. 正しい基準とあわれみ：「疲れた者・重荷を負う者」はイエスのもとに安息を得る一方、神の義を頑なに拒む者は裁きにあずかる。
 4. 終末的完成：毒麦のたとえなどで、最終的にはイエスご自身が人の子としてこの世界を裁き、義なる支配を完成させる。

これらを総合すると、イエスは詩篇72篇が予表する「正義と公正を行う王」そのものであり、その王権は奇跡や教えを通じてすでに地上で現されつつあり、しかし最終的には「世の終わり」における裁きと救いの完成によって完全に実現すると示されます。

したがって、マタイ11:2-16:12は、イエスが旧約で約束されていた「義なる王」として、神の義とあわれみを具体的に行使しておられる姿を浮き彫りにする重要な区間だと言えます。詩篇72篇の冒頭が願うように、イエスは神から「公平と義」を受け、貧しい者をあわれみ、不信仰と偽善を裁き、終末において全世界を正しく治める王であることを明らかにしているのです。